

地震の前兆現象は起こるのでしょうか

今年の元日早々、能登半島地震が起きました。その上、津波も押し寄せたのでした。地震は予告なしに起こると言われますが、正月の1日に起こったのはまさにそれを実践してしまったのでした。その後、結構大きな地震が起っています。台湾でもマグニチュード7.7の地震が、そして豊後水道を震源とする地震もあり、気持ちの良いものではありません。地震も台風のように何日か前から予想できたら、いろいろと準備ができるのにといい、「地震の前兆現象」について、実際にあるのかを調べてみました。

濱口梧陵翁が「安政元年海嘯の実況」という手記を残されています。安政元年11月4日から書かれています。安政の東海地震の影響から書かれているのですが、その5日の部分に「井水の非常に減少せるを告ぐ」これは、11月5日の午後村人2人が、井戸水が減っていると報告にきたのです。こうしたことは、他の大地震の時にもあったようですから、前兆現象でしょうね。その後「遙かに西南の天を望めば、黒白の妖雲片々たる間、金光を吐き、恰も異類の者飛行するかと疑わる」よく、大地震の前に地震雲が出ていた、ということが後で、週刊誌に写真が出ているのを見ますね。

最近、週刊誌やネットで見た情報があります。「イカ漁師の間では、大地震の前にはイカがよく獲れるというのは、有名な話だ。」という事がありました。今年、日本海側、富山湾で「ホタルイカ」がたいへんな豊漁だそうです。だから、漁師は大喜びかと言えば、この豊漁に一抹の不安を抱いているそうです。能登半島地震が起こったばかりだけれども、もうすぐもっと大きな地震が来るかも知れない、と心配しているそうです。

「豊後水道の地震と南海トラフ地震とは関係ない」という専門家もいるそうです。

「やかただより」へこういうことを書いて、皆さんを怖がらそうというのではありませんが、こういう情報を見て心配になりました。

「防災の絵本」いただきました

神戸市にあります「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」の「防災100年えほんプロジェクト」から「防災の絵本」3冊をいただきました。「人と防災未来センター」は、2年前から『100年先の未来まで、伝えたい、大切なこと…「防災・減災のノウハウ」や「災害の経験・学びの伝承」を、絵本の力を借りて世界に発信していく』ということで原作を募集していました。



原作募集のチラシは、「館」へも送られてきましたので、皆様への配布コーナーへ置いて、お持ち帰りいただきました。

この度、初めて絵本に仕上がったということで、3冊をご寄贈いただきました。

「たったひとつのおやくそく」

「おじぞうさんのおけしやうがかり」

「ぼうさいバッグのちいさなポケット」

の3冊です。

主催者は「いずれも、100年先の未来まで伝えたい大切なことを描いた作品です。この絵本を子どもから大人まで多くの方々に読んでいただくことにより、防災・減災の一助となることを心より願っております。」とされています。

絵本ですから、楽しみながら、子どもと共に一緒に読みながら、防災・減災を心にとどめ、いざという時に備えたいものです。

「稲むらの火の館」では、図書の間コーナーへ置いて、来館された皆様にも読んでいただけるようにしていますので、興味のある皆様、お越しいただければと思います。

百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

第39回 確率論と決定論のあい

災害に真摯に向き合うならば、社会は「偶有性」——もっと他でもあり得た——の視座を確保しなければならない。これが前回の内容だった。各地で頻発している災害の経験を無駄にはせず、「他山の石」にしようという身構えである。

しかしそうすると、被害の想定は“何でもあり”になってしまいそうだ。最悪の最悪もある。嫌なパターンの組み合わせも無限に近い。もはや、きりがいいのではないか。そんな反論が沸き起こって来そうだ。

そこで登場するのが「確率論」の考え方である。リスクが高い所を割り出し、物事の優先順位を見定める。現実的な落とし処を探ろうではないかというアイデアだ。たとえば、首都直下地震や南海トラフ地震などの確率評価も発表されている。もし確率が「(相対的に)高い」と判定されたならば、そこに資源を集中的に投入(防災投資)すればよいことになる。これは“理”にかなっている。

ところが、実は「確率論」だけでは人の心は動かない。知識が信念に育たなければ、行動は惹起されないのだ。30%の確率だから30%だけ行動する、というわけにはいかないし、仮にそんな中途半端なふるまいをしても、ほとんど役に立たない。選択は、防災を実行するかしないかの二択のみ。だとすれば、結局は、ある程度のリスクが認められるときには、それを「要・対策」案件なのだと「決定論」的に受け止める他ないではないか。

このようにして、確率論と決定論は往還・循環し、ときに結託さえもする。防災専門家の講演会に行き、耳を傾けてみよう。縷々、詳しく最新の知見を“科学的”に説明した挙句に、結びの一言は、「備えあれば憂いなし」と“情緒的に”断言しているではないか。確率論を迂回した決定論の提示。われわれはこのような“あやしげな”理路と、どのように向き合うべきなのか(続く)。

【館長日記】

○ 1面で、書きました「人と防災未来センター」からいただいた「防災の絵本」3冊に関する事です。この中で、知り合いの人が原作者で名前がありました。「たったひとつのおやくそく」の作者、「よこばやし よしずみ」さんです。この人は、昨年までNHK和歌山放送局でアナウンサーをされていました。今年の夏、松山放送局へ転勤されました。絵本の原作者、ということが分かったので、さっそくメールでお祝いを申し上げます。ご本人からも「プロジェクトに応募して、まさか自分の原案が絵本になるとは思っていなかったのです、大変驚きました。津波てんでんこをモチーフに描いています。稲むらの火の館を訪れたみなさんにはぜひ読んでいただきたいと思っています。」というご返事をいただきました。

○ 公益財団法人日本公衆電話会和歌山支部の方が来られました。最近、携帯電話やスマートフォンの普及で、公衆電話が減ってきています。だから、若い人たちが公衆電話のかけ方が分からないという人も多いということです。ところが、大きな災害が起こった時には、携帯電話がなかなか通じないということが起こると聞きます。そんな時に、公衆電話を使わなければならない事態も起こるそうです。そういうことの啓発や、「災害用伝言ダイヤル171」についての案内等の啓発活動のため、ポケットティッシュ、マスク等を配布してください、ということで預かっています。館内3階のチラシ等の配布箇所へ置いてありますので、お持ち帰りください。

<稲むらの火の館の紹介>

濱口梧陵記念館/津波防災教育センター

〒643-0071 住所 和歌山県有田郡広川町広 671

<http://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/>

*開館時間：午前10時～午後5時(受付終了4時)

*休館日：月曜日(祝日の場合は翌平日)

(世界津波の日の11月5日は開館)

年末年始(12/29～1/4)

*記念館だけの入場は無料です

*また、6月15日と11月5日は無料です